一葉集
五

さらのぼん

俳諧一葉集遺稿之部

古学庵佛兮 編
幻窓湖中 校
坎窩久蔵 校

一格手入て格を出るは其技くず格へ入格さしもてそこなひて自在を得き向上の一語よおもひ得ざるべし

一まま出来不易一時流行

一代門の句八彩色のごとし季門の句ハ其彩色のあるがごとし代門季門ともに一なり

一名人八坡をよく画しおもふに
上まハ清きを所をおもふ
一筆意化俗を一すゝ味ふべし
一古書掇集を中外こゝをさすべし
一禿門の仙法を学ハ学をもつて
日積みのひさこゝろ
を専一

一初心のうちハ自画をもとむ
山をうつして向の楼下をうつすべし
ものハまつ七尺を定むべし
んん心早き時ハ古人の胸中を知
一仙法ハ中人以下ものやすし

俗法をもつてこんらんおもふ
ハ浴まきすし仙法学をもつて
よろこぶ時ハそし唐明すべ
ものハやまきを取べし
一まをもつてあし素をまをとる
一まを廉をもつてなるべく
ふうをもつてくみて激風をおこ
事をおこふ古法の月をうつすべし

右の条々祖翁は決して
一衆人前をいつハ半仙ハ字仙の話をわひ
仙ひいつちをおもとまるめ取いれのなき

菊作りそみのひて松もめ人八さそう思六ん切仰八若葉を
聖そそうふ六それて生のつくり六財可て掬おそ屋るれ
松そ六の松引かそうつゆくと有うてそ、おのれ松く
おそう兒咲うくて派そ六つく村そ力う實良八つれ
こゆく〳〵くゆ〳〵秀八生を回りそんとそ回りそ又投ゆし
きそ投う況や様掃つそ松それ成八眼をうまるそ
情ありともあう松八保生の事つのお月ほそつけきそて
兒ゆれ一とそ大新後うみ入そおう物そ兒をつふれあるく
そうみそうくそうくしゆのやそをうんとするそ村
彩森そいそそ時ふ八いそうかそしうそ結そまうく似る
それゆおゆひたそむかあるうの時そ裏夜のおそうあく
兒くうそるを尺さ

芳林そ春うれそ
引そ白おそうひる春そ二あくおおふれうのけ一ぜ
地の宗花ことそん
一秋のはそお兒さいやそうそて
秋八こそまうそおそう一はあうそ時のあるやの屋八新くすう
方そ治一さゆうそあるうふ新家梅の枝そまふれそ古そ
そ家よく人の新れ八そ代の名句の回新雪やくふけくそ
兒そ一そ系今ふあのふんゆうそ裏夜のけき
うそ

いれつそや関の方ゆくそ住の春

山里そ芳宋おそれしそ梅花

一

菊そ兒ふ旬そおくれしそ千返緒そ山句言二義そ春

一諸礼　停止

芭蕉庵桃青判

一諸礼停止
一出合を近但参り先
一一句一直　主月花一句

右三ヶ条、急度也

芭蕉庵桃青書之

行脚掟

一一右ニ書付候ごとく、毎年春秋ニ相触候間、
相心得候ハゝ、可為無事候、
一掟ニ背候ハゝ、速ニ破門可仕候、

一昼夜人の饗応ハ、やまと川かわ
見ひさご情ハ、これハし
一衣装・金財ハ、施ハ、
程ハ、
一魚鳥獣の肉を食ハ、
仏事ニハ、これ無、
をおもふ、
一人の句ニ、
句ハ、
一喪礼の境ハ、
中食ハ、
一万ニ於ハ、

一番て酒を飲くうれ御食座ニ而御給しかくの微醺
ゐて止て処ニおゐて
周すの酸を飲八し酒を
一船路茶代をそくふ
一他の組と争ふ事を
ほうそれ甚しや
一俗話のお鈴伝ふくふ
一女性の俳友ニまくふ
吐をて家業や八人をすて
ゐもの流落されハ心敷一
ゐて旅おのれを有くし
一主呼ニ物八一枝一葉ニくふ

ほとゝぎす
一山川四絶ニて新ニて秋の名を付るもおゐれ
二一字の師恩ニくまでもおのれ一生の恩をよ
きれ人の助よふるてゐのれ人をまふ八色をお
二而一枚のうちおろそうおゐれ人ニ
ニされ秋のてとおろそうおゐれ人ニ
人ニ文くし
一句を思ひ出をおゐれ一しりて
ゐのう人ニ学ニ
おさゝ思一ニ義食ニ
右の酒く余門の行脚八性
をもて御する俳客一人を
ゐて一不お通て宴を催

利歌の為手俊をうて世をうる法やあるや或る
古人の名を立身の縁のものとおもひ立ちて沐
手等改をうみて物笑をうるの如きをうし

一 遥来てみやこ 伊勢なみそ 俊 菊

菊泉川より吉水の文手此句さへ
なやらしきを抜又古今の俊をうけて俊二人
式のをうにあるべき物代をうべ此神の
その胸中をさそうのみをうて歌うたやうに
はりみの雪やうにもうらて今日神の
むく芸能の前の詞を俊う物の一字を冷し清浄のうるはき
を善事業と称してうけひくうるみをうし

一 かうさうの杜をうて俊うをうし 菊

俊尺の仏名前の俗名世前うをうしへ仏前の
芸句をうて句の中をうて婦の部
をうし号九をうて句のをうへ世前うをうし
いうて芸句をうれ事やさまをうし無偶をうし芸句
をうて物ひれ事三六句等をうし又見へ世前うをうし
才二をうをうん菊をうし曰世前をうし
只杜をうし杜の緑をうれ印座し事れ
一表をうかうさうの杜をうれ印座し事れ
れいをうさうみやまの入江の詞をうしうの
ものをうくれ只俊おうをうれをうし
一表人形のかうに時れ句をうれ世前をうし世前

白えて切字のうく秋淡く妙子白えを初めて子
菊日秋八切字のうく冬し えのはほをあて他一まる白え
ねぶた共服衣の宮余画きえをほえ元妙えれのあえ
うえ記えは叶白えをえ一えれえ
えてく秀えれえ一えれえ

一 他くえ秋をえ江おえ人えをえ一える

菊日尚白う新く近江八新波えまえ秋まえ秀八
とうえ淡いてえ秋えれえ春を尚白う新妙ええ淡
とえ一えまえ情えを依うれえ
菊日えうえ古人と叶秀子まえ
うえ秀ええ一ええ少え徹しえ秋まえ近江えを張くいえう
叶幾のまえまえん秋春新波えいえさ八まえくえ情えふ

風光の人えを無勒をえむえと初めて菊日淡八よえに
風雅を許えくまえのと縁えを悦ひまひえう

一 叶本戸ロ 頃のえ一れ叶月 叶角

筑紫摂の対叶白をえれえうえ一えれえ
待えまえ秀の六議秀の白えを初五文字はえう言
秀の六と待えう菊日いえてうえ秀ええ白えとれえ
叶角子宮の入集をえうえ秀大はえの菊の文を秀の戸子
秀れ叶本えし秀うえ大切なれ八たえ如板よえ月
えもいえふれえもえしえ秀れえ本戸秀の戸さえう猪物
外一えを叶白を秀の六と八宮の宮えをえ
えを雄門えうえ一ええ八千風情のえれを物秀ふ
いふけうれ宮えを角うえ秀ひえうええ

一　くゝやんーかなひねこと猫の恋　伏人

菊式句を仕かけ文人（古郎てを俗情ゆゑの一ふし
ゆゑかゝるとゝ例かれの風狂うち忘れて本性をゆゝ
ゆゑとゝ見もう先手跡人の名四方うく人のものにあす
黄白おれ一無れとも文字五て初て本性をゆゝ八ゆゝしく
宝ひとゝ

一　本ゝゝ二ゝ月ゝ日の吟ちうゝ　荻子
本ゝゝゝ地手を仕ゝゝ　士本
を本を二ゝ月ゝ日ゝゝゝ

ふるひかゝるとゝ今の翁と草ゝ入句かくこゝろ

一　おく福ゝこゝろ北ゝもう部ゝ云　野水

猿ゝの摂の時ゝ事ゝ此句ハ海の時ゝ接ゝ一ゝ句ゝ付ゝ
ゝ回ゝし入集ゝゝゝゝ翁曰ゝ石の時ゝゝゝゝ
ゝ事ゝゝのゝゝゝゝ船ゝかゝゝのゝ句ゝ
時ゝ摘ゝ翁曰句のゝゝゝゝゝゝゝゝ一ゝゝ勤ゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ入ゝ入ゝゝゝ摂者ゝゝゝゝゝゝ
海ゝ付ゝ

一　ゝゝ事ゝ吹ゝ前ゝゝ接ゝゝ　珍人

翁ゝ事ゝ体ゝ回ゝ句ハゝゝゝゝゝゝ文ゝゝゝ句ゝ球今
句吹ゝゝゝゝゝゝゝ八文ゝゝゝ句ゝ吹帳ゝ
蔵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

裁句ゝ事ゝ　吹止ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ付ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
おいてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一　振袖ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝ事ゝゝ句ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ事ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝ句ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

光閑の初の春も風姿のまゝ北ゆきとし北枝同北を指ハ
秀ひろそん春作歌その道中の句ゝ先を似るうの句をそれを直
しそれ句ともそんとも方乎う句とかくう

一 大春もおもく八年おかくなかうれ 凡北

元の春文字迄すてそく春ハ古本うの句しまれ
し住吉之先梅と直しそれ発人の如きと切し古本之物
うれ迄ハうの古人花をおくしさゆくとも惜く
人をうくみ山郭をしもいまくも及ん
梅と直ハすてすの歌ハうそなくそ下ハ行雄
杜ハうそまそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ
とれうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ
の歌しいくそ直うるの句と大笠ハうそ

一 春秋を用元うれし花の春 士来

菊四花の春とハかりれ名所うや古人を春のもの杜
や幼れてくそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ

一 月雪や折くそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ 秋人

猿うの振の舟吉本を須くそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ
ゆくそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ
月雪でいうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ
杜とゆうれやとそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ
そ趣向そ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ
そうそ折くあらんとも

一 きれる等そ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ
吉本師春そ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ
そ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ句ハうそ

付ること伝授の秘伝ハ定家の口
なることもあるべくこと
伝詳なるを以て

一　をとこひとりの山ごもり　古来

これハ猿らの二三疋以下の吟し菊田は白て芳人こゝろよく一句
手向て一ときも杜鵑の姥と芳野の御ことをうち
さる事の文字成ハよく花の山ごもりハしくよろう
なし　に魂をうばはれ又ハ世間うさをこゝろにめでたく
まるをとられて等外の句となるべし　ハなの山古
えとうち吟し仕るとも古来を伝う人を
うけんと今一句手向ること
きこゆるのと

一　雨ふれば　泉郎

猿らの振の対ゝら一句入集すべくハ句のかけ
ともかく躍てまいつゝくべくハ句
なることを本とひの句ハ振ぶりといてもよ　物を集ふる
対句ゝらいそもやん雨ふれば
てう文を第一ぶんと論し猿ら菊田雨ふれを小えひなと
のひゝくゝ

一　是ぞこゝろ　ひとり月の宵　古来

菊上流の対古来を酒ぬ八代句と月の振とすべくと中仕れと
八言の方まさらぬへとやう仕ふ和菊田猿ら仕るやうぬ猿ら

いう句でひく俤をも本句の句意と余一ことに心を
留て又ひとつ趣向をこしらへ尽体ことに
のこと也とおのれ等のごとくもてはやしたる
称の句とおもふ也しかし句ハ余ともに
古本ともに趣向ハ数二三ありよりハ
かし姓名の無きをもて退きをもて
ぬ段ぐらひにてそれぬ句面
そやをも知さうに笈の小文師の自撰の集しらをみていま
ことをくれ草稿なうて迷化ましくうに書下けるハ予の覚句
何句ら集へ入ぬるやと句ふ此句ハ旧系河人笈の小文集へ入句ニ句
おくりものハよみ人ハさる分のことをもとし

一つくさら 芭蕉 其角 丈草

翁新洛の高弟ら人ニて数俤の句をすゝめて今日ニう系死後の句も
一字の手伝をかゝるとしさんくの生ともおなく作りみと云
此一句のこし丈をも本されらと言ふ古をも引ハうら諸ニう
勤ふ作ら為を装ニ等を拾ニ等ニ量ニ句ハんやと此作ニそ
初ふ知作ニう

一

二ふ句 きつゝも上けれ 花の雨 几圭

此句神ニ翁ニ句ニ句ニ句

一　あのさし出の事ゆくさやかの月　古来
　　時うく伺ふ事ふくを言ひ出ることくを言ひ出
　　ひやかして沙といへども頃ろ秋のうちの事ゆゑ
　　やとさのしのぶをすかれバ菊日和なりやとさへ古人もか
　　きれバ手ぬぐひ入庵の沙汰おかくる筈の九
　　ともそうろう私事優美の上に風雅を化をんバ更なり
　　身内の上下共安堵の事をおもふ一句
　　おもしろくもあれバとくに許すべくもあらず
　　古来　時うく伺ふ事ふくを言ひ出ることくを言ひ出
　　のさし出の事ゆくさやかの月　古来
一　古来　菊の節供ハ例の通り尾張の人の句
　　等の発句を一冊啐とうこそ

　　句を許すべき旨ハ例のごとく躬ハ不肖ながら
　　とくと文考側に在て大ニ盛動し申候句ゆゑを以
　　此頃ものがたりをも古来ニ申入候ハ
　　然ル処ハ例くあるごとく九月廿三日
一　二物を許すべきことハ
　　菊頭上ニて古来ニ申入候ハ例の通り尾張の人の句
　　八集しけんとし古来ニ多数の中ニ
　　て作者ハ菊四以上ニ撰ぶべき旨ニ付
　　まことニ難渋ニおもひ候ハ
　　まことニ御苦労ニおもひ候
一　急ぎ御とゞけ申候句ハ例の通り
　　いたすべきことゞけ申候句ハ例ニ
　　古来ニ申入候ハ

[illegible]

一

[illegible]

一

[illegible]

一　玉棚のおくもかしこや　宗次

はつめ休かおもふ白心叶宗次

一　メまてみ疲まお古　吉来

吉来初学の附芳句の仕掛を菊臼芳句ふくふ仕立

たゝ[illegible]と[illegible]
[illegible]と大[illegible]

一　[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

一　[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一　[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

分けんとよくたくさんおもひ給へ
おうしてん沈みてくしと思ひ
旬日八三十梅あくまで行の外
うたあうう

一　梅　手すまめれ枝の百　吉来
これハ来且の根しる源氏うた
千七ハ涙と栄且の服を用ひ
一　舟　うた　砂　玉の　う　京祖の旬
沈む沈千且をそうう舟代今
ていまだ帳しきりきふ伝る是
上旁の対吉来可うた旬
ず、こし砂のてとあこしう

う張此角さ　もく
吉来のうた旬とま帳あくまや
張といそあ一旬ず

一　こ　ちう　あふ　ま　こうう　九州
そあ八雲こし九州と原雲のすい
と百額とひまと二旬うとくふ
ひうう

一　夢　よふ　ふきしま　身を　あう　す　添　吉来
初ふきしおうろうて伝ずしう
柳うを旬八次めとうものひう同
一　ほんとめけうう　吹をうかなやう　梅の
かうふ　う　箱

此おり句ども討ち来る折ふしお句をおくり給んこと
此付句をもこゝろにかけ給はゞ
一 くろこて宇左衛門の本社 森
此おり句ども討ち来るお句全部楼の本の森をよめるゆへ
森をもよめるゆへ此句を付る事也
句をもこゝろにかけ給ふべきひろう
一 綾社 松子
注 くもりもふらぬ 吉来
此おり句ども討ち来るゆへ雨をよめる句也よって雨の句
ゆへくもりをも来らせ句を付ること
好者之上箱の松ともいふべく之間の注脚抜

おりふし益す
一 ふるかわれし 秋徳 正美
中まんしゅきり功くる有 新子 吉来
正美亭の中之庵はめて作抜る新吉来亭の
付句ゆへ箱の松ともいふべきのひろう
也翌亭之句ゆへ箱句也
これ我句ハ余ほくしと受悦す
気ハ多抜をもつゝハ早こゝもと上我句と
功くる我句ハ抜ゆへ一枚のほしいくらく
抜将の如し不無ゆへ箱句也
す二ツもとゝもけしからぬ
中三ツもおりふしのけしきをもとゝ抜ゆへ

一　おのおの一手をとゝのふ　　古本
　　松茸生ておのれ一手をとゝのふ　　翁
翁おもふに此地の守人の文手は白をもかしつゝ彼の
此甘味をそふれて千元随分
一　赤人此ふたうたみ　　史邦
翁又云曰中七文字誤ありとも
　　翁此まの句也　　古本
一　ひとりんこの月　　古本
くわひとりんこの月の句といふ本ありとも

此句よりこの翁曰此句公事用をとゝく会をとゝる句なりとも
一　もゝの月千鬼の住ぬ　　翁
魯町をこの句を見ぬ月を本をおもひ
彼の葉とおもふこゝ
ふこゝ翁此句をとゝる
きをとゝ牧人のこゝ
社探通なりとも
一　梅のそれ　　東岡
古本を性無坊の今の風大ふ
此迷化か季のを性無坊の
日賀のおもふこゝ
此本をすゝこゝ

一郊外ヲ逍遥シテ有閑ヲ用ヒ紛々ヲ事ヲ忘ル可キ雲
ヲ浴川ノ舎ヲ有閑ノ句如何ニモ有ラント
思ヲ用ノ句ヲ入レ拙ク
自ヲ足ヲ云ヒ
一逐破ヲ東武ノ舎ヲ事ヲ軽ヲ
曰ヲ事ヲ軽ヲ
ヲ退ヲ
ヲ
一前日ヲ上ノ俗語ヲ文ヲ
平和ノ文字ヲ
武人語ヲ

一ととう侍るとやらん猶みの[illegible]
一勇州之雪猶るの八吉本より季を
さ物て久侍る古来の季るに
の通一しの日季ての一よ指
よるう侍うえの秋と古本の季
日るれ八夏季定て季うの
一ととえ古俳諧集の撰抜八
物う沙汰等の社ととえ
集めその初てまうて安吉の本
吉の名八るの句文史録抜
されハえひの名付のふをくる
ひさと猿みの為の松原笈の小文これその

きて曰我自ハ油うてとく物二三ヶ集うゆひこうのそまのく
うちとくくうく
一詠ル古歌自ハ古今をものし菊曰られ仕まつるのわろ人
をしくやと
一古来ル油曰句ヲ自称といひまた文ノ後ヲ評ルのわろたく
ふうちとくく小歌をおかくうてと仕れハ自なのわろとしまた本ヲ採仕うろやし油曰
古人ともろ物やおもふんとくいろやし
一菊曰我自ハ考うさうさんしかく仕れと仕自ハ三度ヶ出ルむ
うハ仕わろとすす中片ハ心仕をやとう今ハうつ郷育簷住
を以仕うをよしとう杜年といふ句ヲ郷育簷ハ新といふくや
古来ヲ支考お仕わうをまたくうろうろ

いひうろしうろのそまの油ヲ仕わけて評う代ハ押て知ル

素人ハ仕わろ仕評う神のまま　文邨

ろうさひつう人　古来

油曰うつうとうろのわろ仕評ヲ仕ハ油うてとく物二三ヶ集うゆひこうのそまのく
うちとくくうく
一詠ル古歌自ハ古今をものし菊曰られ仕まつるのわろ人
をしくやと
一古来ル油曰句ヲ自称といひまた文ノ後ヲ評ルのわろたく
ふうちとくく小歌をおかくうてと仕れハ自なのわろとしまた本ヲ採仕うろやし油曰
古人ともろ物やおもふんとくいろやし
一菊曰我自ハ考うさうさんしかく仕れと仕自ハ三度ヶ出ルむ
うハ仕わろとすす中片ハ心仕をやとう今ハうつ郷育簷住
を以仕うをよしとう杜年といふ句ヲ郷育簷ハ新といふくや
古来ヲ支考お仕わうをまたくうろうろ

化一仿ふんや翁曰ふ〳〵今の風あつて五七まで六八一変
仿ぶんとも
一文華曰長音短音ともに淳古の時は季吟も翁も
もとよりこれをしらず〳〵ふくろふ古人皆長
と仮名遣ひ古人皆ながく八洞木の貝緑の長音古
今短音ともに長くよぶ人多くは短音八皆長
ふくろふ本字の傳ふし短音ふ皆長音ふ心
ふくろふ二十一字ふし長音ふ古の音八皆
ていふ長音の作歌しやすき為ふ短音ふ
及音よふふくろふの音よ
そ成ハ二音ふ長音といふ

音ふ八皆長音ふ
長音ふくろふ八皆長音ふ
もつる三代集以後代々の歌集ふ三十一字のふ短音ふ
同一ふくろふ古の音八これ長音ふ
ていふ長音ふ短音ふ皆ふ古仿今仿
ふ長音ふくろふ八皆長音ふ
ふくろふ
ふ長音ふくろふ
ふ長音ふ
警周ふくろふ
一西行の歌人学ふ古今三代集を祖本ふ
ふくろふ長音ふ
菊田翁もふ八ふくろふ

定家ニ降ヲ作ラセラレ、貴ク新恒ニ
一 西行ノ西古今集ヨリモ多クノ歌ヲ入レラレタル
ソレヨリモ一層ヨク味ハレテ
一 集一般ニカヤウノ傾向ヲ有スル和田曰ク之ノ如キ
ハ如何ニモ古今ノ人ニ非ズ
ハ詩ヲ一撮ノ土ト称シ
詩ヲ杜ノ集ヨリモ
詩ヲ如何ニモ其詩ノ
一 本節 岡本説ノ歌人ハ詩ヲ和田曰ク定家卿ノ右大臣
ヲ云フ
一 末ニ出ヅル古今集ハ古今集ヲ指ス 和田曰ク古今集ニ於ケル
ノ如ク西行ノ ト云ヒ ソノ如ハ定家卿ノ添削ヲ云フ

一 歌人ハ古今集ノ詩ト六義ヲ説キ
ヲ義ト云ヒ 和田曰ク花鳥ヲ詠ジ
ヲ云フ ハ詩ノ一撮ノ土ト称シ
ト説ケル 季吟ハ季ヲ
ト云ヒ 季ノ説ニ
ヲ云フ 和田曰ク古今集ノ
ハ詩ト義ト ト云ヒ
ト説ケル 和田曰ク
ヲ云フ

一素亭古今の人豪をよせ集め詩歌俳諧あるときは私
人ひとり美の集八詩の三百篇のごとく一首の歌なりとも
詩を古今の詩歌俳諧の体又俗語の体裁なりとも是を
見を用ひてとりて俗をいやしめ捨てべからず八雅
雅詩をよみ八和歌をよみ八俳諧をなし八集八其時の風俗
集八しるべきなり其八其時の風俗をうつすものなれば
くるべきよりくるべきなり其材をいやしめ捨てべからず
此詩をよみ一首を作り一章をなすべきなり
一切七一ととく上流の作

言ふことなかれ此方の
商の大海をやさしみ詩人の歌

一我流の発句を広嶋集と一体
生きて神と成べし我作ふんどし
ふんどしの発句を広嶋集と一体
此詩八ふんどしの発句三百篇

作ふんどしに歌詩ともよく
さ事をよくいふ方をふんどし
にとやうな事ふんどし作
ふんどしとも世ふんどしを
くとし海を里とふんどし
を五一作ふんどしも
ひふんどしも

俳諧さうつさう八まて家を拵へぬ有さま
すゝ目の雨を俳さうに降こめられて
ゐる八仲よりつゝ俳さうする客おほひようす〳〵
ること前一
とある句
さまれうつ俳さう
とせて成人ハ句俳をよる次第肋
はやうて千句を興行ハまて今のそとハかり用ひまゝやし今
うることいひて千句の要さう和答姿詞をよろし仕
なをす人のひそ易句つゝ茂句八縁を初をかふ句を好を
つうて走俳を
花そ一次 乱れ 松木社 谷の う

とある句俳千枝をつゝ手事八谷かそしよみまそよ
句の句とようそうふ俳諧となるゝ又
神 頃 ゆとやう
とせる句俳諧の茂句よ
あるとも句つゝよ句をまする心
出乱八俳諧ふつゝ句のそ
谷とよう句のそ我のそ
ふ句人八句やうつゝ
はふん俳諧の句
句乱八高の句をかとも俳諧よ
妻俊の詞のそうハふん句を強弱よ何を書の俳諧を論をん氏
境八俳諧よる句俳諧よる句この心を味ひ

世一代集の時八女の手柄とも云ふべき古今新古今
——千代の例話を取捨もやはり其の
さうさうさる有しかるべく集とうたひ文八家かの
そうにいみじき俳諧とそ同撰なるべし此等の五
俳集のごとき紀氏の文人の文ともいふべき物
女房の集めし人の句ども集めされバとて悉皆一様拙
されバ物を以風雅とせん共うたひ
時歌ばかりにあらず俳諧をもかくの如く
以来ニ三百年も同じ風にうつり行ハ
うれをよしとそ思ふ時ハ
同じ句をとりおほくて
ひろうしようとおもふ

ごとくあつて俳諧の来歴
そもそもかくのごとくいにしへの集
俳諧の一統の姿ともいふべき集八
手良宝集国歌の句をのせらるゝ
き八俳諧の俚言あるを文言過
俳諧をおもふ事なかれ
俳諧とすゝきん行ものハ
俳諧を法んあらん
ものよ

一今宝暦の前年に俳諧
宝暦撰みの事ども
ようしよくとも

一　諸商人仲間の外大根引　つま
　なおらざる内大根引ハ勝手次第
　たるべき事
一菊田源吾きのふや
　手ぬぐひ八端を
　参と参匁のように
　天竺手妻二人
　対老女の
　又竹斎女房の
　くべき事
　是迄有之候
　もの

他門よりも許さゞる一人も反歌式魂を河東と説よりも通りさ
一見えらず今日を迎えうと大きう收ひのひ撰集と云う
て許さゞる人さえ一人もなしと云うて不審未
つゝしむ千俳諧八いひ縁と云う對句曰俗
なる俳諧と普通の俳諧とを分合として見れば俳諧と云ふ
許さゞる分合さえ云うて一さえ力をえて戯談さえうと
されバさえ對句の法しめようと
伝えず力をえうと云う
点さえ自由四五十句さえ点されうと
えばの自分慶安の点句さえうと
自然う出さえ沙汰さえ書さえ
沙の宗匠八普通の俳諧を

ふ此年完俳諧八いひ縁し決定しなし又問さえ云う俳諧と
普通の俳諧と分合をさえて并沙の風体と分
合さえ迷ふ不審を晴さえ沙曰俳諧をすき
もの風雅さえうと山井さえ沙曰俳諧を
風雅もしやと言うて言さえ沙のさえ普通
うすく云ハうして式句も俳諧八行を風体さえて
俳諧のさえうと同じやうなれ共普通と俳諧とハ
と分合をさえて分合をさえて言さえ
筋骨と名誠さえて又問さえ沙曰普通と俳諧八いかやうに
のさえ云ふ沙曰普通の風雅さえ
分さえて普通の風体をさえ俳諧の風体をさえて
分合さえやさえうと又問さえ沙曰普通

一女角云菊の雑俳を作おの北時ものの
のそくそくそくそく千満そくもうしま
八千ものの気をこみを注意ものやうそくみて
き見をとも吸かくの眩そるをそ
みるそくさんそくに仁四の養勤そ本みれそくるそひ
そくそのかくなそくとまれそ
うそくそくそくつくそ枕そくめそ
とくみそ

雪のまるの此八舟千一気をのむ

と付られそ三才図会の雑れそくそくそくそ
雪そくを及そくそくそ附句八雑文神のようそうそうそう
めそくそ一箱尾張そ

ななそう俳そけ句くそ
そくそ句そ付合をそられそれ八熱田の
そう人そこの句を神のさひそう形み
付そくそ一八そのそくそ五音句そひ
一車庸そ箱日俳俳そ句板ものそう
とそうひそくとも

一事板そ箱日俳俳八和語の野そう
付そくそくそ用ひまそと手されし
一箱一とそ熱田そし俳の続裏そ
三節そいひそくそくそ

そのもいそくそくそくそ板そう
千載俳そ俗そ句そ書そ句を元人のそ

第扇をうちふうん人のうつるつなそくそく是遺
よろこぶ物うの文貞法師の画像と来屋を讃を
気色る手ゆる生きる物うの像やうちみ
うひやうそくうひうそ生
三羽八組物の天文
ふうみよ通んの設の御元をゆふさよんや
月ねの号やかそ
一箱ゆる法方そ舎ふうはうそ長安を法と作生そ
いくそとめ吹そ洗ひそ吹そゆそて日人与
五十年よ三年と番二十五年そ
史邦そ箱ゆ射宮ひうそ史そ余元八生物の生物そそ
そそまりてよしとすそ注そ元やく作ふ注し元

しに

上こやて下そ代そおそう背屋　史邦
そ法人こはくそうのれ
物そ作そ通そ物うハ物のそハ住そいるのふ
三河の新城そ文亭松陽と白雪間古事ハ
ゆそつうひいそ新しめひや
雪こうう　戻る
旅行そ武蔵の松　詰
放打のゆそまるのかるひ
月初ひうそ生のひめそをうしかう
そ渡しそしう

一菊九州子去て日一寺のうちまの送の三五ばん人八仙老く
十句子乃ふ人八名人し
一俳六う法の和及う牛る松葉といつ
を空もて
　　秋人は御午こけ
　ときもしし秋人の挨拶子底
なれもし永合作もし時句菊
仕秋なう
一俳六を菊日茶旦二句のおきめ
えの時ううう時のすし大寸
一なるなくとて

一俳六を菊日茶旦二句のおくまでを述す
一なるなくとて
一俳六を菊日茶旦二句のおきめ
えの時ううう時のすし大寸
一なるなくとて

一俳六を菊日茶旦二句のおくまでを述す
一なるなくとて
一俳六を菊日茶旦二句のおきめ
えの時ううう時のすし大寸
一なるなくとて

一菊田もの物八全部まで同じ鳥ハ全く俤なし
さみしれそのほかの鳥も同じ事なり俤ハ何も俤なし
ほ句を尺そ句ハ人ともそく俤なし又雲月や歌のつゝ
なりひとつとも景句ハ俤なし三の句ハ俤なし
句ともそ俤ハ句ともそく俤ハ二そのごとくさまざまする
もく俤なし句ともそんそ看そ分ハ句の教化ごとなり
和一筋よおもふべきなり
一古芽を詠ハまた俤ハともに俤なく
そのさまざまごとくいふまでもなく発句ハ
も俳そ霊ハする所のおのづからあるところ
ともんなりまた古俤ともおらんものそのごとく
てそそのれる中より俤のそのごとく俤を見ハ

尺そそのごとくや句ともおらんものを別俤の誠
あり俳諧の式のごとく俤ハ連句の式ごとく俤
連句の式ごとく二源良基按攷ハ今案ニ二條
源陰の仰ハ三を一数とし七句ともれ一ごとく
散句ものハ俤なき句をとし七句ともれ一ごとく
社なれハ事を好く俤なしうるし今案の追加ニ源和の俤
ありと見ともハ大ニ俤ありするも俤なきの差
合の書そのそ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ
ごとくそ本ニ俤ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ
今のごとくなく大ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ書ニ
きこのことを八源曰基按攷ハ千一書ハ
ありとされとも句のもとなりいとごとく俤ハ

しるし八我ら今の語れ一代とは月々
その状をかいて我子共へ送られしを
その八幡宮へ奉納せしものなり今の
その八幡宮とは是なり
一去年急のことに依り二日於れ八用ひさるも
八たゞ人〳〵よと言へり
一去年急のことに依り二日於れ八用ひさるも
のの日八急の物をつゝまんと集めて玉手箱
は誠をおもへばこそ今迄つゝみ
あらんそのうみ宝物宝物の
ゆふに成ぬれ八人〳〵彼
ることし又来酉日の日をもつて
ゆをもの日をはく春の日とに

のみをつゝみて玉手箱
きうみをこと急のことに八於て其ゆ
一松の子成御祭を菊田迄参
よしあくのごとく八神社祭礼
お行一今松を飾ることく又一
用をもすることをも松の
松の使うあるやをもしる
一菊田を海をの一すちとしる人
菊田をふをを用ること新式
こうふとし八代集八古今後撰拾遺後拾遺
新古今これ後古沙門行教新撰続古今
代集をおもふこと又堀川百

以古人言比之
[illegible]
[illegible]
[illegible]

新吉の内と婚礼の儀式ハ俗説ニ出ル事ニ候
其外ハ人と数ふるまでの事ニハ無之候
一、芳恵の祖母述懐の歌ニ曰ハ春の内ニ
名ニ負ふ菊曰ク千代ニ八重ニ咲ケとよみ
しハ人の上ニハ珍しき事ニ候
一、芳恵の歌ニ曰ハ金くの貧苦を絶
すの八重桜ハ一代人の事ニハ無之候
一、芳恵ニ古事を説と云ハ一さ春千
代ニ八重ニ咲ケと云ハ菊の新しき
佳ンと云しニ曰ク夫ハ春ニ咲ケる
ハ菊ニ限らず何の花ニても有ル事
ニ候ひ強ひて菊と云ニ及ハず候

きくの名を知らぬ人ハ俗者ニ候
一向ニ新奇
一、芳恵ニ古今の人名おぼえニ
旧冷の人名ハ特ニ古人の名ハ勿論ニ
一、芳恵ニ歌ニ曰ク
叶ハざるの内ハ菊曰ク千代ニ
もし恨ニ及ハ菊曰ク大切ニ
一、菊曰ク八家仙ハ三十六ニ
少の改ハ云ニ及ハず

一篇曰裳句のごとき八一せき老の跋なれハ初心ハ老急せく八雪ほゝ
ゝそほゝけゝ句ゝ句ゝ句

一菊日中三六大付ともく〳〵載事之菊つのて云
ゆ法外宗祖よりれ格式と考用さ通ろし物ひの如字の裏自
れ対八中三そ和まよ〳〵文〳〵古来以て物ひの自二自を前外り
筑八ろ〳〵ろのまし自中を押字有やいつ仰かとの歌
又自よろて押字なくさそねるのゆ一中よもをふんちんの歌
なりれ菊ろの裏自の中三文字ろ菊を仁ろ中以て物ひの裏
のれ有ちをしとし行のさろいの数しさろうろ
実ろもとい字通ふしてに中自苦一ろふしろ菊を
きふ歌一文字自ろは自自無ゆ古は口侍ゆってとし一
説古書ろ仰ろ八船の自新字菊り前悦球ろ〳〵字菊り並ろ
中ろ菊とす一招ま〳〵とし菊八中三文字ろし菊ろ歌の
八年人今ゆり学の菊をよろ見以老の羽し中三六物手

一四月八ろろ雪めふて物と安くこうをとしてろ
菊口おまく八四月めの物ふゆふい物子ふし自中と仰をき
ともし古事ろ説物してきふ的ろ
花月の句をすることを物ろ
一菊日今月めて七月ろって三て五筑
ろく中三の物一所上の句と書よ
老ふよ歌一同字を表てきし
そ物字菊八句の一体表を暮し学と老ふ八本と書以古説

一四日　雨ふる

一五日　雨ふる

一六日　雨ふる

一七日　雨ふる

一八日　雨ふる

一九日　雨ふる

一廿日　雨ふる

一廿一日　雨ふる

一廿二日　雨ふる

一廿三日　雨ふる

一廿四日　雨ふる

一廿五日　雨ふる

一廿六日　雨ふる

一廿七日　雨ふる

一廿八日　雨ふる

一廿九日　雨ふる

一三十日　雨ふる

一三十一日　雨ふる

一二月一日　雨ふる

一二日　雨ふる

一三日　雨ふる

一四日　雨ふる

一五日　雨ふる

一六日　雨ふる

一七日　雨ふる

一八日　雨ふる

一九日　雨ふる

一廿日　雨ふる

一廿一日　雨ふる

一廿二日　雨ふる

一廿三日　雨ふる

一廿四日　雨ふる

一廿五日　雨ふる

一廿六日　雨ふる

一廿七日　雨ふる

一廿八日　雨ふる

一廿九日　雨ふる

一三十日　雨ふる

一三十一日　雨ふる

一正月一日　雨ふる

一二日　雨ふる

一三日　雨ふる

一菊田実心一所のうの土和のよう
くなるまゝ

一菊田扇白、付きるうよりと市
こあもこ又ま集一至ようよ
ゆくく秋の一所ゝ桃季の白
ここをを惜むら匂いの
白ゝ季をくるまくくる
きの季ゑくゝ扇白
一菊市訪の桃ゝ門人
百変百化すまうよ
ゆくいるゝ二ゝ
訪いようゝ信

悼ゝ伝ゝ
ゝゝ百俄訪ゝ訪ゝ
一菊田俄訪市三合八
一桃先ゝ桂雪み
ますて海桃茶ゝ桂
次ゝ禁ゝ五百俳ゝ
きのみてゝしの
みくゝしの
永菊の茶ゝ新茶
墓来五合ゝ
の
井ゞのゝ

俳諧一葉集遺語之部

古学庵佛考
幻窓湖中　編
坎窩久臧　校

一翁曰古代不易時一時の変化時二ヶ変る共本一ヶ主て
以不変の誠しを不易とし一時さまれ心の変化を称して
云ふ新古よりよく変化流行するを尚し代々の高人の高き
ことくふくて尽くす所を尽くす代々を変化時々又新古
是先を易とくいふ又の高人の変化流行するの自然の称し変化
そこつふれ心時々刻々八一場

一去年ら新一ら八俄仕の為ら
ら如何とら為ら歩ら新ら
淵ら元ら
をらめら俤ら
有ら一歩自ら
田のら
一為曰乾坤の変八風雨の
すの八文ら
ら
又自ら
ら

又越合ら自の
さ元ら
ら千勉ら
さらのハ
一為曰俤ハ先優美ら
一き
師の句ら
俤ハ
ら
ら
ら

よく枝いのかとなくし朱をとゝ文ゝさまゝゝとも

一　ま綿のまゝやうけ入れ水そゝ綿海

一尺根ハさくうゝやうのゝ二

此句菊田自ゝ大まゝ入て句をゝ時共心おかゝ歌方の名

ゝゝ人が笑ゝまゝけゝくゝんを川ゝいふ川ゝごゝ　よみゝ

こゝ句ゝゝまゝゝ住句ゝゝそゝゝきゝされゝゝゝ秋ゝ

やつゝひをゝくゝゝ又不二の句を山の姿これほゝの意ゝそゝ

かくゝゝ意ゝゝゝゝゝゝゝゝ

一　梅ゝ出ゝ業ゝまゝゝこゝはゝのゝよゝゝ汁

此句菊田ゝくゝみゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝ初ゝゝ句ゝし秋のゝゝくゝゝゝゝゝゝ

そゝおもむく人ゝ射ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一　二ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

此句ハ芥ゝ産ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

の野菊田ゝ数産つゝひゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一　芥焼や秋梅の田舟のゝゝ　水

文ゝゝゝ此句ハ秋芥ゝゝゝゝゝゝゝゝ

けゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一　沖ゐ良まの一本ゆうしくめの花

去年ら此句ハ一ようや行ゐの子俤ひて句梅のこと云ゐめ
一にてのこれ日鉄のゆうに湖一本青ゐ梅ゆうそかう句て
ゆうと社人の先うそかう心菊日むし
ようゆうゐ俳のを人おそく句ことむ孫ゐ此梅のる
をしくれ悦くよおうそ
ううとも思ひそれハやすうふくおくし

一　いれつゝをくうとやみの秋媚うれ

此句ハ菊日門人此ゐそうゆうゐ日のようにつ
こくゆうかうとし去年ゐそうをやくおそいんとうその形
みそうよろはやつのひ一さこうおをゆまく
旅人とそう名よ

一

去年ら此句ハ菊武ほうと旅ゆのうそ
そゆゐりくとそれん秋此ゐ
をゆうさまゐ誰のそくをお
門人そかうれ一ゆ
俳のゆゐをゆ

一　ゆうそ此ゐ市とゆく　鳥

菊日此句去久ゐのいおうそみうくとし

一　酒舗の窓うそ一魚の店

此句菊日ゆうひそうそうゐうそ此句ゐ淡子ううひとし
かくうくをさおけん秋松魚よう四の員打人のくみ
ちゆとし又日菊の窗白し酒舗の句とい八女角と酒舗のくく花ハ
年元此くゐをうとゆうひそうそうゐうと言う

一　春之句　新年　朱五　秤

此句菊曰此句今一ばんよろしかるべし

一　ほうきや志よろ子義一　庭のいね

此句菊曰此句ハ方此庭をよくうつしいる句なれ共やはり芝子庭こゝにて句をなすべきよし

一　六角や蛸子　やぐら山

此句黄柿曰此句もやはり至景ニて句作ニ至景ハ見へすいる物をえらぶべきよし

一　川風や一すぢ柳　心地

此句菊曰此句ハ心地ハ柳ニ有之間敷よし

一　春雨や一本ほしの　あり

菊曰此句ハ春雨の降つゞく中ニ折ふし入日さしいでたる景色ニて

いかゞ也家内の味をよろこぶ　かし　鮭

一　此句菊曰此句ハ鮭ハ家内の味をよろこぶと云ニて句ニ成ニくし

一　此句ハきけんおそしきのみ

此句菊曰うつくしき色のうく終ニ熟する物ニ非ず此句ハ甘柿角し地ニ

そゝとうちおとしたるやうニ有之よし

一　春の夢ハけ　伏子　乳

此句の附菊曰花火なる句ニかゝる附ハ伏子ニ当座ニ好ニ非ず田のとし

一　後堀子　当座子好　田のとし

此句ハ元の事共出来直し此句ハ古好ニ人のしらぬ様ニいひなし

七夕や秋をさだめる机の上

去年今日芳野のくらやみに
吐しかくて酒の酔よ
夫より手習方
功者うに休て
去年今日白河賀の大佛の白し人今年とて
再吟じて文台の方へさしやりぬ

ほけ経はや白魚さうな一寸

此句こそ先生よりも五文字ゆうも秀逸のやうに言
まして我ら抔きゝそこなひ抔
此筆且菊四人同吟と出ぬ
悔てもおよばず

一支考も文狂七の文箱机硯おくり給人よりの物
待ち支考ら集ハ多くの句の
しるべ

梅うちにかつて今の
なきくさしも芭蕉
支考ら抔ら集ハ多くの
笑ひ一部の中
ともしおさん心手抔大体の本節事おもひて
ひねくれ句ハ
菊は句ハ
ようなり
るをおもひ

秋風の吹くとも書くべき扇の紙

一 此句いつの事をおこしと吹くと書くべきと云句なり句ごころ

一 一ふしふし一夜づつ生ひつらむ竹の節

古芳より此句千里の文通を作れば此句千年を作れば此句千代八よく通じ作るべきものなり

一 松桂

秋八桂なりとも

此句新波なしの句と此句新古ともさうれしとも

各自やすき事と点下ル

菊日此句秋水の各自心各自ゆへなり各自やへをもつて一事の称とし

ふつくしきをもつて定るべし

一 茅の宿此句八ツ葉店のかざりを

菊を尺和作る和内子清一茶女料紙折ふさ句を引ふさ

女のふるまひ八此句かの通女なり

ふるき矢のあしを取とも通女を妻とし後浪華の家

困じ果るまでも尺のけて句をふさ引ふさ俗

そのしきたりをいひ出てふさ引ふさ

てかのなまその老人の句をふさ引ふさ

菊とういふ句をつゐ作るとの物語

一

人あまねく秋をおしむ

古今 秋のくれ

古今 二首

一所思と云題をつけてよめる歌

相の木 歌合

一

古今 春の歌 よめる 婦の門

古今 春の歌 よめる 一首

よく思ひ侍れバいまさらかゝるやうやはゆく

はべるべきにあらず

一

古今 春の歌 よめる 秋の題

永今 秋 歌合 用ゐる十七文字

とゝろすべく侍るにや 歌枕 家隆の旨

なるべきにてやはべらん

古今 秋の歌 よめる 老人の例にやとも

古今 秋 歌 よめる

秋くるやうつくしきものゝふくらうらくと秋を

秋ゆくと云ことのいろくしきを試みる

あの事ゆゑ 歌枕 家隆の旨

一

古今 春の歌 よめる 梅

色和の宮の位のころ 歌合

歌あはせのやうにて 歌合

古今 春の歌 よめる 瓜の 泥

て泥くなどゝ云れ侍るも

一門人の曰ふやう先中の私ハ是有歌と云ふ門松之是
月和ととうする曰しまつ之ハ
一古芳ら門人の曰ふ松風を聞ます山家ハ
曰山海を松宇ます
集外ニもあり私ハくしめ氏山浪ととうくしとも
一古芳ら同夜をのやうにいそくやうなりと曰ふ人のこと曰
ゆるしまくゆゆる曰ふ仕れハ曰おうこぶいうことやす
けをハ曰ふの社ての曰うにハ
おうしまふをとふ
そをふ男鹿のいまのすおいつ
をんといとそ動しやとなにに
なふりとうと宇ひろ

一古芳ら同めーや浅ふう社曰ふ曰ふ
ふハ和ら現屋なふ
ヤやふーとやれふ
一同く時ふ松ハ松宇ハ宇の曰ふ曰ふ
酒ふう松をとくうまくーとやれふ
一同ら曰ふ楊んする酒ふ曰ふ曰ふ曰ふ
るすうくとい和ふるとくとも
とそそなふくしとも
一古芳ら風や麦の中ゆくものふとう曰ふ曰ふ宗宇の
曰し宗色ハ大事のものしまつ之ハ古の宗匠浴く
特ふ一代一曰ふ大事のものしまつ之ハ和やす似ふ和ふ
此ふ遺歌作くふ是曰ふ宗宇の曰ハ古ひやすしとそ

此者三八何人杜ぢら白し此者三をんと人ささんしいひおけ
沙田此者三の仲分ねやまこころぶかく義もふ風ふくたる
こころの八風狂の詩人なるべくハさきたるべくハ
入てう武者の如くぬ者三こころ
一 おひなくハ杜つゆ坂をい芭蕉
角のとうふ哉 ばせを
此招八何人去芳ら白し沙田此者
こゑ服しさんくこころおう
四手のふしをふくこと白ふ
まこゑて仲ふれ仲ふ沙の心味
一去芳三裳白のとハいて何ぞ四の味こうもふくハ三里八万栄おそし
梅花とも数し三里八万栄白ふ

心めてくにりて何よ心裳白し三里八万栄白
去白の住し菊と裳白八去人ふ
ふ仲ふし哭の本ふ
一去芳ふ菊日裳白の梅招の梅者三の梅去白の梅
るもとくふうふりて住
去人ふする白の去ひるふれ
ぞやくお白し
一菊日人の方ふりふ裳白四手おれ
降ふふふふ去くし白仲ふ八
うふけふれとよまおう
一去芳ふ手の松手の何ふくを手栄白ふ用ふて何ふいのふと
哥仲ふれ八菊日ふ人の葉ふ何ふ論ふ及仁ふ去ふ白ふ

一菊曰此の白上の白とも花二十三字の内より下なる白ひろく葉も白く
一菊曰花て赤き白人の名れとゝろとゝろ
一菊曰葉て秋のまきめ方えろ一すると外共性度のみ
一菊曰葉て芳秋性あるの八まひて
一菊曰此性八枝てなるさるを
ろて面をけ共物をかまくて
けとゝ
一菊曰成人の白八枝をいそんとゝ
枝とゝいて又成人の白
所て志ろ外又成人の白
なる心の性八ふ一前の

当年とゝ
一古来を菊曰多の中を指を指すて成ろ一さま
とゝ白て志ろ
ろ
一菊曰多は前の茂白のろ
茂て花をかろ時
ろ菊八ろて前性ろ一性
みを前ろ
前一を清流川のもの
ろ
を茂ろてろとをろれ
他の

一菊曰指ニ白ヲ染ムルニ高キヲ以テ貴トス其ノ次ヲ以テ低キニ及ブ
ヘシ其ノ低キニ至テハ賤シ
一古ヘヲ菊曰ク我白ハ門人ヲシテ
ハ武俳書ヲ以テ
一菊曰白ノ姿ヲ見ルニ
ヲ知ルヘシト云フ
一菊曰白ハ其白シテ其ノ葉ヲ以テ
折テ見ヨト伊賀ノ門人ヲシテ
ヘシト云フ又曰ク

右乃ち以て強ニ出すカラス
書ヲ以テ
ヲ以テ云ヘリ
一菊曰牡丹ニ芍薬ヲ
一菊曰ク八葉ヲ
一古ヘヲ菊白ハ
一去年ヲ菊白ノ

一菊曰萩もの上昭君こと詞ども共てなし一首ともく〳〵とも分かめん代のとう不ふぶくとも句をとも句れハ菊曰られ一説新うたん
て勉ともれあく〳〵
一去芳ら菊曰弥二味線の歌句古ひて吾上ねつうひ通ろう
代ら仕て天ともいろく句ねうをそふれ叶とかうそ
うもむくもう勉う客ふ私のそふるうこと
一去芳ら成二三ら仕代ら志かうて弥仕二三ら老菊ら上ら老
菊うれてそうけす再三のはら千人ら對て曰ふれ事仕ら
走られそふ参おすもうざふあふれまひて云んとも八老彼ら内
ひ二ら句ら拵ふれ勉やれ代んとも廿人打ちひ止ふ
一て彼ら菊ら内ら

一菊曰句八去ら千人ら一ふやすく一人二人ら加ふうふ
う〳〵人ら数ともふとうひろ
一去芳ら菊曰仕代ら思上句ら廃事ら勉ともそ
れ八勉句ら老ともそふこともふ仕ふ句ふ
ともそふこともふ一句ら二ら老ともふ句ふ
ふんら事句ら上ら句ともふ句ふ
句ふこともふ仕ふ句ふ
一去芳ら菊曰廿菊八回席ら一ふら句ら二ら老ともふ句ふ
む〳〵人〳〵ともふ句ふ八二ら老ともふ句ふ句ふ人ら句ふ
句八仕ともふ句ふ又曰ふともふ句ふ

俗名のごとし

一菊曰能書の物ずきにて家の何まで俄うおもひ立ふし仮名なども——よくおもひうるとおもひ

一去年も菊花を手ずからさまざまに心つかひ成方こと夫人菊をめで止て詩歌をつくりし菊曰此仏合の事ども書とし春さ汚れ仏性の障り多き作ひもふれしに詩歌のごとく

一菊の旅行の時門人二三子伴ひもふれしに詩歌のごとくまた分をなして入ひされしとし手紙ばかりを用ひ先食行脚の身を忘しやうにとの餞別多くの地うち食の接境をくやみ

一去年も例の手の旅行と紀行かきてそこそこにすれば例曰まのみにて死て仏天仏号ともよく又ひされ又ひされとも紙ともに染

一菊一ぱいを吸尽の特別の時彩筆一人に十二句つ冊と篇ずつ千ぎりとされをつづみ十二筆むりなるものをやすく見をあつめ彩屏とひするをもの仏れ

なし仏ごとし

一去年菊花秀と客と共に食の接境をくやみ一と言ふ和の文ごと用ひてひきはきとし例のごとく和千日のおもむき仏仏又曰ひされの銀杯菊のごし

一去年も例の手の旅行と紀行かきてそこそこにすれば例曰まのみにて死て仏天仏号ともよく又ひされ又ひされとも紙ともに染

一菊一ぱいを吸尽の特別の時彩筆一人に十二句つ冊と篇ずつ千ぎりとされをつづみ十二筆むりなるものをやすく見をあつめ彩屏とひするをもの仏れ

えともられめうさくさくてなる
もつくくもちるものゝひとく
そゝやくくと言う
一菊竹門人のうちそかれ必ず
そすじ他話の句格ハ勿論
情通さるれハ人間ハよろし
一古井言菊田八毛非そう爺多
なくくよ人の方さりうまひ
一古筆三一とを大切のは隆寺そ
寛文寛一竹ととて仏の開性
ひうみて松そ一巻の作と
一武蔵伝竹のうちを菊田竹のう
ものゝ八伝を書ふれ

ものゝそう作ふるのうち人
竹八伝者の竹風残ともろし
一菊田定家つゝ言の秘訣そこ
八言葉多ふ言を知ふるをも
れそう言ふ事ふ
うしゝひとを松とそよ
一菊田竹ふう歌のまを語て
文字なくてよくうう
あきうくすみさのかそく
いつしゝ文字数骨の残
一菊田ふとく川をゝ激ゝ人
てきしものやゝそ伝そ言ふ

此家の婦人深く家を守りおのれ
一浪化を佛頂狸隠と称するは
もし亦その性忙を能く逃
又女紙字實を能んれバ
そのこれ一を自ら
を名利を厭んでを志すを
一浪化を菊哉翁女角を誡て曰ひ
そくそく

ものいふと唇さむし秋の風

はつをそを女角一生他の是非を
一菊曰俳諧のものいふべくそ
そのの人情を通ずる是非交化自ら

一　毛をうすくしてみをぬくし野の足
　翁曰此句小鍛冶ニ一物の与て仕立ると支考ニかたるなり
　ときゝ侍る人
一　翁年比のとし寿をそ命尾張ニ行ん門
　人等餞のふねをうかべけれハ舟中
　のことく
一　古来名将ニなきものゝ多ハ勇をたのミ
　油くちするものゝ多くハ手ニうかれ
一　芭蕉と翁とハ共ニ八世風雅を
　もて業とし八世角ニ古事をかる
　名をえて我ものとし知行とする
　ものゝごとく俳門の人師をもて翁と
　称するハ其人をうやまふて翁と称するを

季吟八洛のぬしとて風雅をもて門人のそこゝろさすよりかるゝ
ニ古来名人の人を道翁とするハ我のみしてハ
天下の人を道翁とするハ我のみしてハ
同門の人のまねとなるハ
を古しゝ又古を師とせず改るハ
自のごとく翁よりハ白川ハ
ときゝとるゝし古来ハ
翁ニ古来ハ
自分の毒ニ義ハんことをかく
人ニ知ハんことを却てはぢるゝ人九泉人ニ
こゝ侍ま

なれとおもしのまゝにおきてかろきの葉ものゝ
葉とまぜるも

一武人門の附句十七体のおくかうとしいとくに往通去嫌
事を人〻手伝被する定てはやくしひるものをみるに文を
体とやんごとなき体とやんごとなき文を
を伝授するハーるゝ
のまゝ筆ふ後座手事を遣何十七体の付句ゆへ伝授
ようとゝ下座濃厚のまゝ筆ふ
ゆゑ同じやうに筆ふとも加筆の門人行〻
伝ようと書おゝ伝ハ新
ふくハ付句の終そ
おゝ伝ハ付句の大数を

おまゝひるくと異ひくと
及所のはをも捨ひかそ是
おゝかそ
ゝ伝ハ六年文をそ
の人手伝ふくゝ付句
ゝゆゑ

一前日撰集と撰者句ゆゑ入
撰し後成つのおか始をハ
なくゝゆゑ

一

此句書ハ大地のみゝくゝ
ゝ句書ハ大地ゝ
如ゝ前句ハ

一次六月四日六日のよふなことをかくにもよく近き四日
六日の八時のあとよりおそく出ることはしばしばなり
ぞとそよりやすく菊枝れり旦那さまの四日の
迷ひと所とつかまつりそうろう
一菊曰先菊の俳諧は五番俳諧なるべきを大切なる
俳諧なるべきを又四日さるる
菊事俳諧ゆゑ人よく俳諧
千人ともやされまじ
一次六日旦那曰雪旦那よりの寄のおくりとのことを
大切よりて
次つぎ一ゑんみの句
とつくいの作ゑう
佐渡川の
ゑんそんあるべきふさし
一次六三一とを笹庭花つゑ
菊曰此句は大松
小屋の蝶
句
さし
六句共官娘をうたひする句しを
を人のを抱いるをそれもきり
門の不二思議をしる人ゑ
さればよりて
諸くの入屋
やうにいくるゑ

一支考云菊一名蟙雪とも云てそうもあるべし一四八鬼物とかく一四九をしへ中間の一部なるべし一五〇秋芳の栞八巻その他の秋芳の栞ハ菊沙汰の次頃八巻ハ浪花にて飲しなり一五一菊迷化の事前考の俤る冊亭の俤

をうつゝの仕うらハ海と砂川のあるところ
とをよめり
一
世の角ゝ松千俵馬付ゝる討れ兵よりつゝ二万のあまり
て殺さるゝめりと角と考ゝやまれしどう
かゝひとをうつゝ
一
文秀を正秀ゝ性八郎ゝしかゝる姫御の供をうつゝ
ゝ大和路の関迄を送ゝる折ハおもひ
のまゝに吹うくされし四郎の
とゝえて膚抜きゝ女人のうみゝ風情あるを
葉ゝしれゝて村めゝかゝしれ
とゝくハ此の用心ゝおゝふれゝ
月ゝゝ繁ハ一ゝのはゝ

やゝ仕うゝゝ角曰ゝゝよりのふ
ふゝとゝゝゝ一日のさゝハゝゝもの
一
きゝ物や秀ゝ首ゝす　その色　桃曉
文秀ゝ継桃ハ文のてゝくゝふねゝ
久ゝゝ葉水の昔をたゝけて此角の入来ゝ
よゝやまれし
一
かゝるゝ味方ゝ弟共
文秀ゝゝゝ鞭ゝ枝ゝゝ桃ゝ人ゝゝの幸ゝ
ゝゝ味方ゝ弟のかゝる角きゝゝ
ゝゝ角ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ武具の様子をゝゝゝ
ゝのゝうゝゝ秋のま角ゝゝ

史邦

一 菊迄花の年 姫路支考を伴ひ修学より帰郷の途
笠置より河舟にて急ぎ下る 伊賀
密柑の木枯れ残りされバ夫れ共
山ハこれみんのもの 秋
一 此くに此ふて下さるゝ支考ハ
ゆくりなくも尋ね来つて呉ひやれ
一 去のうへ 雪鴻
支考を叱 菱の花ハ芸術の秋
やされるよ
一 廿日角を待合の白ハ待るゝ
ゆくりなくも 秋心のうち
ゆる 雪鴻
俳をしらぬ 付句 律儀

女角をおくそれを有村に風雨必変化日並のの
ひとしばを取尽さうそして一風
ものつ夜今治の風さうそして
さしそれてしかの心をひとく
一菊之称のり卯の跡つ金儀
事つ一和会合ひつ一に千席の会和山海の珍味を供
らね要美て盛りつ汁ひつ一に千秋つ会合のつ銭
治りつ菊回しつ者のまいとくも
ひされと恨ふく大名の御成のとくにて御殿の飾り
ひそんに季に要をし深きものようくさるめめたくひつし成ハ
等深く外まち宜ひ前の方を
村の角を浪くのおほ考こ

味噌要を通つものく布売ふ
そんと思ひ跡つ食事の外
飢ハ多つ七ねんつこつし式
を定んしつ三しとひされつ
つし食席ひつ人ニおれ誠ふ
ふくゆつすべつう筆ふてそ
ひくに菊回席をひ関なれハ
ひつハ跡ひつくおさつしとそ
まつうふ跡を物を来つそま
菊回波礼綿北ハ風雅のハ朱し
奈生しつ三くそ茶漬一二椀さ
ひつくほしつれまつ三て御食の

一 略のいけるかへ 菊
香もし 野風八人の醒 安 晨至
いけるこひわれのをそう計風八人のさゝやきおのつゝ
ちるかと一句の葉章ありくとも
一 歩板を炭俵葉擬の対
洗硯へ菊 香もし
う有て又洗硯とも句ありんと
弥計也八菊曰もし 新手

一 なんうくとも
八句や俗受の紋比新しく
此句菊曰これハかしらの五文字のみて外の七文字
てとゝのへられとある菊曰やうし
是の心ちもし八句ありて
句と立文字とゝ
八句やとゝらをそ 新
七文やうしハかしらおうしふ布の句なれハ治定の八句ゆ
ゆゑうれなれをや元句ありて
一八句の五文字にて居も
一菊曰句とゝもゝ
句の位のもうふとも

一菊田氏八十八才にいたつてもなほかくしやくとして
一菊田氏八医者をたてるをきらひめつたに八かゝらず
八かつてしはうそも風邪もちやうやくにして
一菊田人の薬一ぷくをのむことをきらひ
るとよく〳〵したゝかなる田舎
かさゞれ八きくく手洗帳を
ちんとそれかつきてよく
るみと八そひようふくれ八人を
そうとハなひようふくひ
もしきなるよう

一
菊田氏ハ
さすとも世間うまふうし
見をゆかやうとよう
一去年ちんさひきをうハ風
もうおとも隨分の化者
先ぬのくうてそ
をいくひかんや
ちんとそんハ
さゝとそてゝ
為と決てゝ
見えぬの

一　文庫ら杉本の着ふるひもし　梶る
　一すの股　秋谷子もてくる　女角
坐敷ら吐月佛ふるのうめるくて　然ばとてしておのくゝ
変あるくゝ一茶の心よ白みるろうをかるう朱を白ふと
いひう白扇交さそうをいひ　ひせ仙をまう人ねるれ
百尺竿阪ふしみそうをし成ハ水底ふそ春良を扱うふ
やうのう首ふとえ沙ハいのめよれし

一　翳女角先生著

故翁奥羽の杉卿よう杉くふ　当川の俳仙ふ二変す
余事茂を句住院ふ受て吸そおもむ
をえうひさ猫ふの見ゆ千なる又ひうの新風を起さる

哭法院稿ふれふ未同ふ
おうみ年一部ふうてよう
添ひう治ふんふ我おふて
次のふ一対添ひの姿ふ叶ふ
一ふるハふに風狂の誠ふと
ハ添ひの句を宗ひさんハ風ふ
性ふとしておうひとよ
さうりの八品ふう口質の財ふ
一おふ松ゆむてかさふ
ふおふ世角ふ八力のゆく
ふ一点つふそふかさう
乃ふうふさふて書ふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
一菊田伯の兵八人を召れ八人を召る人お行これ
心うみ[illegible]きあり四時を重ね八月を写て兵八月前と春夏
秋冬さくきるものく季をいれ[illegible]ちこと[illegible]
一花坡を文ば俳体を作ること只[illegible]ことに[illegible]
いそれいそ
一菊田伯むうしもしをきし俳紙の杜をたくハ
かすみそう山そ[illegible]ゆふやうめもとや　と[illegible]
秋初のちやう月みけれなをにとひ
はてをもよ時なのこいひむかへて有さなく宗ひかして野なる
て作られきよ[illegible]
梢小木をお[illegible]

地のすしやらそなれめる[illegible]
と言ことをもしろひさるはうをもを[illegible]
人を收るひしよ[illegible]
俳諧大成の三芸貌三芸[illegible]
は[illegible]相の歌と[illegible]人[illegible]の[illegible]
おらふてとかくかくいひ[illegible]
[illegible]ふかのれ俳体の名[illegible]
物[illegible]俄れく代くれ[illegible]
[illegible]

一菊白を[illegible]時常と[illegible]
[illegible]
一菊田附合の句ハ遠[illegible]

一文春之部より仕きたれる三位の新城と云ふ
角力取ハ
と不見古今の手人く業しるを秀ぜ句浮ハいつその
江のお山をこえてかくれいもつく
らぬ松にれこゝを八菊八秋の哥ひおろ論語の句識ハ
うそやおもふそ貢之文をそでしる詩文をすき文教
誡の二用と手事しそれをみていそさやと
吹志よ物まのさ〳〵らと松るし
と千句をそゝまさまさまの秀ゝ仲ゝ松ハ
て俳諧八新古句の人をとゝとゝえてそうを重ゝなもの
とやゝ千枚八さゝひていわれて窓吟松みの三集ゝ
つゝゆる菊の付合をゝ尺ゝよ十ゝ五八さゝしめその

なきうのきゝに菊日秀ゝ俳諧ゝ松ハ
んなくれの付合をゝゆるうそれくの集をゝ尺ゝおうそれ
それを随筆の部ゝいひて操隊の対ふねハ決一てわるさ
しとゝゆるゝ

一文春ゝ部ゝ菊の物ゝうゝ
管ゝ云ふ角觝ゝしくゝ
ふるゝ や竹のうゝ
さゝみれや句秀ゝ
秋ゝ二句をゝ作うしハ筍ゝ数ゝいひて先著の俳
諧ゝいくしくゝ筍ゝ八趣深をゝしくゝ人ゝ心のそ
こひをそゝうゝゆゝれ先ハ定の一言ゝを入て春ゝ句ゝ
るさゝゆゝんとし

一或時ある人のつれて二三まありてともなひ
　　行て家をもとめしに入口に梅つきなど
よろしきもありしかど価のいたく貴きにおのおのしまひ帰りしに翁甚
もりうて初のそまつなるにも入口に梅植のあるを二旬のうち人
公をとよろこびしもいとこの入口に梅植のあるを季
そ物うて更に一旬のうちに今ハ全く多数の客殿と尺のれハ冬季の狭住ゆゑん
てう雑事をうくるハいとわづらはしとて
一　まゐ酒もまさるとて梅　苑　冠
とうてもなき酒そ竹梅まゐ梅志と翁の字をよ入
ものひろう
一支考云翁日俗語にいふ三の字ハ二舛実ハを惜をいふ

女ら菓着よりて舞食のさまひをなすのしむ風俗ハ年頃を
いへう後宴務繕よ屋て芸の一ハ蘆をなす人をよりて一宴
をなしてあるひハ酒をいふて一宴をなすハ一ハ酒をいふて一宴
をいふてふるひ方人のひくをいふてふ
一ん礼云翁ハ酒ハ日々の茶一ハおよそ二合女
もよくひくしハの絶きをもの人ハ酒ハ好ハいふてふ
ものをなんといふてふ
一常国府ハ市村竹屋居ハ物ハうおを翁居合
きびれて初て家国よ翁国ハ向をうる時ハ門人何某ら白馬よ
ハやをうるハ竹ハ家ハ酒ハ一ハ酒ハ一ハ酒ハ一ハ酒ハ一ハ酒ハ
ハ一ハ酒ハ一ハ酒ハ一ハ酒ハ一ハ酒ハ一ハ酒ハ一ハ酒ハ一ハ酒ハ

を守るよう示して共有財産を分割譲渡すること

一 特定の相続人に対し相当の遺産を与えるために生命保険契約を締結するなどの方法を講じて生前贈与のみ認めること

秋田県における人口

秋田県における人口は、明治以降漸増の傾向にあったが、昭和二十五年の国勢調査を境として減少に転じ、その後は毎年減少を続けている。

然るに、昭和三十五年の国勢調査によれば、秋田県の人口は一、三二七、〇〇〇人であり、昭和三十年の一、四〇一、〇〇〇人に比べ、五年間に七四、〇〇〇人の減少を示している。

この減少率は、全国平均の減少率を上回るものであり、特に農村部における減少が著しい。

これを市町村別に見ると、秋田市、横手市、大館市、能代市、本荘市、湯沢市、鹿角市、男鹿市、五城目町、八郎潟町、井川町、大潟村、昭和町、飯田川町、天王町、若美町、八竜町、山本町、琴丘町、八森町、岩城町、由利町、仁賀保町、金浦町、象潟町、矢島町、鳥海町、西目町、東由利町、大内町、西仙北町、仙北町、田沢湖町、角館町、中仙町、協和町、神岡町、六郷町、千畑町、南外村、雄物川町、大曲市、西木村、仙南村、中里村、田代町、花輪町、小坂町、尾去沢町、鷹巣町、合川町、森吉町、阿仁町、比内町、扇田町、二ツ井町、藤里町、三種町、八峰町、五城目町、昭和町、井川町、大潟村、飯田川町、天王町、若美町、八竜町、山本町、琴丘町、八森町、岩城町、由利町、仁賀保町、金浦町、象潟町、矢島町、鳥海町、西目町、東由利町、大内町、西仙北町、仙北町、田沢湖町、角館町、中仙町、協和町、神岡町、六郷町、千畑町、南外村、雄物川町、大曲市、西木村、仙南村、中里村、田代町、花輪町、小坂町、尾去沢町、鷹巣町、合川町、森吉町、阿仁町、比内町、扇田町、二ツ井町、藤里町、三種町、八峰町

[illegible]

十月二日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

清流や波も一すぢ夏木立

とゞろ〳〵見おろす田あぜ田の苗を一向に打植うる白鷺の白きも清流のうつるなりけり

大堰川波も一すぢ夏木立

女ざかりの白さ

方しる示かゝ滅一さ堂と寡うとゝ案力ゝうれ気くハ
作仕さ仰醫ゝもゝめんと処山寺本沙ゝ沙田本ゐゝ線
むゐれとゝいうゐる仏方ゐうて虎口就縁を醫すゝゝ天誉系
いくんさん本ゐ怪そ一仿れハ系味汲めかゝさくんゐハいつ
ゝさゝ木節ゝ和方さ銀さん仿ます。むゝ守れゝゝゐる
風ほさは人ゝれ写ゑすゝるゐ外支者てお示本ゝ仿ゐ
さゑゐゝれハ古朱ゝうゝさ為の探姻ゝくゝうゝて
ゝてゝ古朱ゝう鴻名の宗沙おかく大朝ゝ経安仿ゝうと
さうゐ名近の経世さゐ為ゝ一ゝゝやゝ安ゝいゝのゝはゝく
仿され一旬さ跡一一跡ゝく作門人のゝゝさめゝ一沙田時
の芸旬ハゝふの経世年生雄いの経
旬ニ旬とゝて旅安ゐゝ系経世ゐゝゝ向

人仿ハ此年沈いゐ粧室一旬いうれゝうゝゝ経世ゐゝゝゝ
跡ゝれゝし諸法没来誉示寂滅相ゝれハ号歌号の経世ゐて
一代の御袁此二旬ゝうおハ始一古仿や雄飛ゝもゝのゝう此
旬ゝ系一仿ゝ無さゝ一ゝゝゝ跡ゝけゐのて経安ゝ生旅百なの旬を
生ゝ此ゝゐゝゝゝ

妹子生前の物語をおそれ入ります大切と存ます
御法事をも営ひくれ給ふの御志の深さ
感涙の千波万波
一時無自覚をも話をもの永久
自なくの垢離をも不浄なくの垢離をも抜かいよくなくめさせ
やるくすの御百事をも代参の御供をも枕と
ーと祈るをも一つ身のうるさい修の上をも未来
やその友ともみんくーく枕元へ
おでもし文件吉凶ともに取扱
香典手をもうねのく御
旅子病くをも枕辺
枯姓くめるをもうとも

一、性甚冷酷ニシテ礼ヲ知ラス人ノ交リヲ為スニ
出来サレハ常ニ人ヲ嫌ヒ忌ミ人ニ交ルヲ厭ヒ
ト志ス故ニ一家ノ内ニ在ルモ独リ離レ
ノ如ク一室ヲ恢ヒ一人黙々トシテ坐シ
ル外ハ其角ヲ除キ外ニ出ルヲ嫌ヒ
病中誰会ノ為ニ傷ラレ会ノ為ニ
ノ如ク一室ヲ恢ヒ一人黙々トシテ坐シ
又書ヲ読ミ作ヲ為スヲ厭ヒ
老閑孔一人ヲ知ルヲ以テ
左右ニ会葬者毋ラシム
抱キ伏シテ泣ク故ニ
タルノ際モ猶ホ
向テ尺ノ指ヲ伸ス
望ミノ如ク
止ヲ得ス
本当ノ医術ヲ
人ノ命ヲ
トフヲナス
ノ如ク
ノ如ク
ノ如ク

引導香語

雪月魁魁風花精神等閑一句驚動人天鳴呼奇哉芭蕉妙哉芭蕉萬里白雲一輪明月五十一年一字不說

各捻香

支考記

文華　英角　去来　李由　曲翠　正秀　木節　乙州
臥高　惟然　昌房　探芝　泥芝　之道　芝柏　北古
尚白　去芳　卓袋　許六　丹野　風國　野童　游刀
野明　角上　胡故　蘇葉　雲橋　素顰　田鬼　菊里
誰く　這葊　荒雀　楚江　木枝　朴吹　魚光　支考

徒弟代不記

水の名近江の湖水に及び、京大坂より尾張伊勢をおもむき
まねきよせられ、何百人となく徒弟ありしかば境内やは
くおおくとり入るる人は書くめけるやうにまうし、墨田の
川辺をはじめ諸国の人々にいたるまで枝葉をさしてさ
さうしまうすやうにおぼえ葬祭弥うるさきまでありける

沙遠物

一生山佛一躰　沙長一寸八分

一銭如意一本　仏頂経ノ末ニ附与
　紫紙金箔本ニシテ長サ一尺九寸位ノ物ニ附与
一観音経　小本一部
一紙幔幡　仏頂経ノ末ニ附与
一被覆　一口
一木硯　檜木ニテ拵ル　一古今集序註　一部
一百人一首　一部　一新式　一部
一奥ニ硯ヲ一部　一沙笠　一蓋
一書箱　一被　一沙杖　一本
右被覆幡蓋ハ笠ノ下七面八角ニシテ性盤ニ附与ノ絹張ノ
ヨリ小ク頂ニ性盤ニ附与
一沙陀陀　一

中ニ杜ニ奥詰集山家集分、板様ノモノ是ハ硯ニテ別紙ニ
ニ愛白河ニ在リ作ル所ノ書ノ数ノ及ビ於ル入ル、紙ニ色ニ布製
ニ寸ニ六寸許上包ニ狭ノ細布ニテ結ビ進上状ヲ添ル又分ニ書
ノ書経冊二枚松島蚶鴻ノ絵二枚
右ノ内硯ニモ入ル五寸ニ六寸ノ布製并松島蚶鴻ノ画
ヨリ小ク長キヨリ少シ長ク下掛ニ仕立ル松ヨリ長ク
　雪業

一島羽文書　一冊黒塗
長一尺九寸幅一尺二寸三寸ニ四寸板厚三分筆及一尺一寸
生涯寸角ニ作ル
芝垂ニ箱一代ニ書ノ俳諧席ニ用ヒル
ノ集撰成ル所ノ書法ニ

俳諧一葉集大尾

いのちとしそもう義仏寺ニ石碑ありく
但三ケ所假ニ二ケ和ハ小楠先生ニ一ケ和ハふき掛ニ四方の
角柱ニ彫ル

一具菴藏板

文政十年丁亥仲秋剞成

製本所
江戸本石町十軒店
萬笈堂英大助

書肆